

# 地球市民のコミュニティ・デザイン： 文教大学国際学部1年生を対象とした授業実践報告

## Community Design for Global Citizenship: A Case Study of a lecture for freshman of Faculty of International Studies, Bunkyo University

井上由佳\*  
Yuka INOUE

### はじめに

文教大学国際学部に入学者1年生全員は、春学期に「国際学入門」という週二コマの必修科目を受講する。毎年300名前後の1年生をランダムに二つのクラスに分け、約150名の受講生を相手に専任教員4名を中心にこの科目を担当している。この科目はカリキュラムの上で国際学部の基幹科目として位置づけられ、入学してきた新1年生にとって、国際学部に入ったら必ず通るイニシエーションのような存在である。

「国際学入門」の第一の特徴として、授業の中で扱うテーマが非常に幅広く、既存の経済学や社会学といった枠組みには収まらない学術的なテーマ（経済格差、国際協力、環境・エネルギー問題、国際観光、ジェンダー、言語、文化、歴史等）を取り上げ、学生たちにこれらのテーマに関連する様々な問いかけをしていく形式で授業が進めている点があげられる。大学入学まで、英単語や公式、歴史的事項を暗記するといった日本式の受験勉強型の「学びのスタイル」に慣れ切っている学生たちに、「国際学入門」で扱うような「簡単に答えの出ない問い」をつきつけると、彼らの最初の反応は「意味が分からない」という「戸惑い」である。答えの出ない問題をどのように捉えればいいのか、それを考えることにどのような意味があるのかといったことが、前月まで高校生だった彼らにはまだわからない。それはおそらく高校までに答えの簡単に出ない問題について考えたり、自分自身の考えをまとめてそれを伝えたり、これまで「正しい」と教え込まれてきたことを「批判的に捉える」あるいは「疑う」といった視点を持って考えることをしてこなかったためであろう。そこで「国際学入門」では、受験勉強型の学びスタイルを切り崩し、学校で教えられていることをすぐに「唯一の正解」と捉えるのではなく、一つの課題に対して様々な角度から自分の頭で考えていく大切さなど、本来のあるべき学び方に気づき習得してもらいたいと考えながら指導している。

そして第二の特徴として、この授業では学生同士のディスカッションを重視する形式で進められ、学生たちは6～7名からなる小グループに分かれて毎回着席している点があげられる。通常、グループワーク型の授業は少人数で行われるものだが、「国際学入門」では何とか工夫して大人数ながら学生が授業中にひたすら講義を聴くだけでなく、自分の意見を伝え、仲間の声に耳を傾けるという時間を確保している。この仕組みに入学者ばかりの学生たちは最初に緊張したり戸惑ったりするが、回数を重ねるにつれ慣れていき、徐々に話し合いを楽しむようになっていく様子が例年見受けられる。

\* 文教大学国際学部専任講師

2010年度から「国際学入門」の集大成として学期末の授業時に「地球市民のコミュニティ・デザイン」というテーマに取り組んでいる。学生たちも歴とした市民であり、コミュニティのメンバーである。しかしながら、彼らは自分がどこのコミュニティのメンバーで、そのコミュニティでは何が問題となっているのか、解決するには自分はどのように関わることができるのかといったことを全くと言って良いほど考えることなく生活している。おそらくこの点について考えるきっかけがなければ、そのまま4年間、今までのような日常生活を送り、コミュニティの存在を意識することもないまま学生生活を終えてしまうだろう。

本稿では、上述のような自己の狭い日常生活に閉じこもりがちな学生たちに、まずはコミュニティのメンバーであることを自覚してもらい、そして、そこで起きている問題へ目を向け、自分の問題として捉えた上でその解決方法を考えることを促すワークショップ型の授業実践を取り上げたい。最初に授業全体の進め方を紹介し、その後に受講生からの声をいくつか紹介しながらこの実践を振り返りたい。

## 1 授業実践：地球市民のコミュニティ・デザイン

2012年度の国際学入門では6月28日と7月2日の二日間にわたって各クラスに1コマずつ「地球市民のコミュニティ・デザイン」というテーマで授業を行った。担当したのは国際学部国際観光学科の教員である海津ゆりえと井上由佳の二人であり、二日間とも二人で授業を進めた。この授業ではスライドを用いて講義とグループワークの指示をして、各グループの発表の際には模造紙を用いて教室の前で掲示するというやり方で進めた。

この授業の目標は、学生たちに自分たちが大小のコミュニティに属しながら生きていること、その多くのコミュニティは何かしらの問題を抱えていることを自覚し、気づいてもらうことである。そして、コミュニティが抱える問題を自分に引き寄せてグループの仲間と共に意見交換をしながらそれについて考え、その解決案を全員の前で発表するというプロセスを体験することで、コミュニティ・デザインを追体験してもらおうことである。

次に具体的な授業の進め方をセクション1からセクション3に分けて説明していきたい。

### ●セクション1：コミュニティ・デザインに関する説明・事例紹介

最初にこの授業で用いる言葉の定義を説明する。まずは学生たちに「コミュニティって何だろう?」「デザインとは?」といった問いかけを試してみた。すると、学生からはコミュニティに対しては「集団」「人の集まり」といった回答があり、デザインについては「作り方」といった回答があった。次に、スライドで広辞苑に書かれた「コミュニティ」と「デザイン」の定義を紹介した。そして、コミュニティ・デザインに町の人々が積極的に関わり成功した事例として、徳島県上勝町の試みを写真入りで紹介していった。学生たちに、この町が高齢化・少子化・過疎地域・交通不利地域・基幹産業の斜陽化といった問題を抱えていることを伝え、このような一日では解決できない構造的な問題に対して、上勝町の人々がどのように向き合ってきたのかについて話した。上勝町では下記の図1のような取り組みがされている。

図1：徳島県上勝町の主な試み

- |                 |            |
|-----------------|------------|
| • いろどり（葉っぱビジネス） | • リサイクル    |
| • ホームステイ        | • 小電力発電    |
| • 一Q運動会         | • ゴミ収集システム |
| • ワーキングホリデー     | • 有償運送     |
| • IT化           | • 廃校利用     |
| • 里がえるエコツアー     | • 阿波挽茶     |

これらの取り組みを学生たちにより明確にイメージしてもらえるように、海津が実際に上勝町で撮影してきた上記の様子を伝えている写真を見せながら説明していった。

このセクション1の狙いは、コミュニティ・デザインが他人事ではなく、自分たちにも深く関わっていることを認識させることである。また、どこか遠い見知らぬ町や村の話と認識するのではなく、自分たちが生きている同時代の日本で、実際に取り組まれているという事実を、現実感を持って受け止めてもらいたかった。ゆえに、先進的な事例として徳島県上勝町の人々の姿と、全国から視察が訪れるという町ぐるみの取り組みの数々を紹介した。町づくりの具体的な様子を見聞きすることで、まずは各コミュニティに存在する問題に目を向け、実際にそれらの問題に長年に渡って取り組み、解決の糸口を見つけてきた上勝町のケースを学ぶことで、よりコミュニティ・デザインの全容を具体性をもって理解してもらえたように思う。

### ●セクション2：ワークショップ①「理想都市『文教国際村』を作ろう」

次に、学生たちにワークショップの第一段階である「理想都市『文教国際村』を作ろう」に取り組んでもらった。教員からは図2のような課題を学生たちに提示した。

図2 ワークショップ①

#### 理想都市「文教国際村」を作ろう

- ・文教国際村の現況：豊富な自然、おいしい水・空気・食べ物、高齢化、少子化、過疎地域、交通不利地域、基幹産業の斜陽化
- ① 家族の生業、家族構成、個々のキャラクターを決めよう
- ② 個々の「わたし」の夢のコミュニティは？
- ③ 家族全員の意見を踏まえて、理想のコミュニティに向けた要望・リクエストをまとめよう。  
→紙に書きだす
- ④ 25家族共通の理想像とは？

このワークショップ①では、まず各グループを「文教国際村」という先述の徳島県上勝町に近い条件の村に住んでいる「家族」と想定し、それぞれに家族の一員を演じてもらいながら、ディスカッションをしてもらった。例えば、実際は18歳の大学1年女子学生は、40歳の母親という役割を演じ、その人の夢を「仕事のない日は手芸教室をしたいと思っている（子供対象）」と設定した。他にも男子学生が、警察官の父親、43歳、座右の銘が「人に迷惑をかけるな」で、夢は「家族を大切に。あと

は個人の意思を尊重。」という設定で演じたり、祖母67歳、甘いものと編み物が好き、夢は買い物しやすい環境が欲しい、総合病院が欲しいといった設定をした女子学生もいた。このように自分でその役の人になりきってもらい、年齢とその人の置かれた立場の違いによって、コミュニティで人々が果たしている役割の違いや求めているものが異なることに気づいてもらえるように、グループを架空の「家族」に変換して演じながら考えてもらった。

一人一人が家族の一員としてキャラクター設定し、個々の夢を考えてもらった後で、家族としての夢を村長への要望として話し合いながらまとめ、各家族ごとに二つの要望を模造紙書き出ししてもらい、それを教室の前に出て発表してもらった。ここで頻出した要望は、「ショッピングモールを作ってほしい」「大きい病院が欲しい」「色々なイベントをやって世代間交流が必要」「電車を通す、バスを増やしてほしい」といったものであった。

今年度の授業では、残念ながらここで時間切れとなってしまう、次のワークショップ②に取り組んだ成果を受講生全体で共有する時間を持てなかった。そこで、このワークショップ②については各自で考えてもらい、授業の最後に提出するコメントシートに書くようにと指示した。

図3 ワークショップ②

### 理想のコミュニティを作るためには？

- ① 文教国際村の理想をかなえるために、各家族で何ができるかを具体的に考えよう。  
→紙に書きだす
- ② 家族の中の私にできることは何かを具体的に考えよう。
- ③ 理想のコミュニティに生きる市民としての私とは？

後半のワークショップ②では、家族ごとにより具体的に何が一番自分たちの住むコミュニティの問題となっていて、それにどのように個々が取り組めるのかを考えてもらう予定であった。一度共有した各自の「夢」を家族ごとに共有して、まとめ、それを村全体で共有した後で、また個々のレベルで何ができるのかを考えてもらうという流れをここで作っている。

### ●セクション3：まとめ

最後に授業のまとめでは、この授業の総括としてキーワードをいくつか紹介した。「合意形成」「パートナーシップ」「one for all, all for one→もやい（九州）、ゆいまーる（沖縄）、コウリヤク（白川郷）手間がい（新潟）」「Give and Give」といった言葉が、授業で扱ったようなコミュニティ・デザインの根幹にある考え方であり、人々の姿勢であることを説明した。

## 2 学生からのフィードバックコメントと授業の振り返り

次に、この授業を受けた学生たちからの声を紹介したい。どのような授業にも共通するが、コミュニティ・デザインという授業のテーマを自分に引き付けて、考えて、それをフィードバックシートに文章としてまとめられる学生もいれば、表面的な参加に留まり、深く考えるまで至らずに終えてしまった者もある。本節では、学生の声を紹介しながら、この授業でどこまで到達できたのか、その改善点は何なのかを考えたい。

「ひとつのコミュニティをつくるのにも様（々）な意見があって、みんなの要求をかなえていくのは大変だった。なので、話し合えるしせつ（原文ママ）や機会が必要だと思った。」

国際理解学科Tくん

「地域コミュニティの改善などの、あまり皆（？）が関心を持ちにくい（かもしれない）ような事も、今日のように皆が実際にそれぞれ村などにいる家族の立場に立って問題や希望を考えることで、少しでも身近に感じることができて良かったと思いました。楽しくできました。（以下、略）」

国際理解学科Hさん

上記の二人の声から、今回の授業をロールプレイング形式で進めたことが功を奏したことがわかる。全員が自分という殻をひとまず横において、文教国際村に暮らす家族の一員という立場に置かれたら、自分は何を考えるのかを想像しながら意見を述べ合うことは有意義であったようだ。

「今回初めてワークショップをおこない班ごとで理想都市について考えてみて、一人一人『何が必要か』など意見がまったく違って話してとても楽しかった。でも共通していたのは、交通機関だったりショッピングモールなどでした。自分は一人一人の意見をいえてあたたかいコミュニティになれば地域の輪が広がるんじゃないかと思いました。みんなが周りのことを最優先にできる環境を作れたらいいんじゃないかと思いました。自分は周囲を大切に、自分一人ではなく、みんなと一つのことをやりとげたりする地域を目指したいです。」

国際理解学科Hくん

「コミュニティデザイン、身近にあるようで遠く感じるテーマだなと思った。実際にグループで話し合ってみるとなかなかアイデアが出てこなかった。他のグループの話も聞くと、高齢者に対する配慮があまり挙がってないように思った。自分たちがまだ若いから難しい部分もあると思うが、もっと高齢者に目を向けてみようと思った。今住んでいる町にも目を向けてみると、また違ったアイデアが浮かぶかもしれない。福島出身なので地元の活生化（原文ママ）につなげたい。まずは福島の現状を知ること本当に必要なものは何かを考えることが大切だと思った。」

国際観光学科Hさん

上記の二人は、まず自分たちの間でアイデアがなかなか出てこないことに気づき、出てきたものも多種多様であったと感じている。同じ世代の同じ大学・学部に通う学生同士であっても意見がこれだけ違い、多様性があることに気づいてもらえたようだ。そして皆の意見を踏まえた上、自分だけでなく周囲の人々のことも考えて行動すること、高齢者の視点からの意見が少ないこと、現在住んでいる町や復興中の福島の町などに目を向けて、現状から学ぶことの大切さを述べている。自分がどう考えたか、グループのメンバーがどう考えたかというレベルを一段超えて、もう少し広い目を持って、さらには実際の動きから学ぶことの必要性を認識してくれたように思う。

また次の意見のように大勢が賛同していた声に対して反対・疑問の声を上げた学生もいた。

「私たちの家族も『雇用を増やす』ことをリクエストと発表したけれど、他の班は『〇〇を生かして』とひとことつけたしていた。それだけで具体性に差が生じ、実際に実現できそうに聞こえた。他の意見で多かったのはショッピングモールの開発だ。私はその意見に反対で、理由と

して2つある。1つは地域の特徴である自然を壊すことにつながりかねないということだ。2つ目は軽井沢のショッピングモールのように、交通が発達しても少子化問題の解決にはならないことだ。へたをしたら都市へ出かせぎへ行きやすくしてしまうだけになりかねない。この案は班の中では出なかったけれど、出ていたなら私はどうしていただろう。反対意見が出たときにたびたび悩むのだが、出てきた案を否定してよいのだろうか。否定することで案が出にくい空気になるのは嫌だ。けれど、否定から新たな解決案がうまれるなら、その方がよりよい案になるだろう。どうしたらうまいディスカッションができるのか、今回は特に考えさせられた。」

国際理解学科Oさん

上記の学生の場合、他のグループの意見を聞いて、自分たちの意見をより効果的に伝えるために何か欠けていたのかに気づくとともに、グループ内の意見に対して反対をしたかった場合にどのように伝えればいいのかに悩んでいる様子がうかがえる。相手の意見を否定する＝相手自身を否定することにはならないことを理解するには、やはり何度もディスカッションする機会を通して、体験しながら学んでいくしかないだろう。これは社会人としても求められるスキルである。このように高い自覚を持ってこの課題に取り組んだ学生もいたことがわかる。

### 3 考察

前節で紹介した学生の声は300人前後の受講生の中のほんの一部に過ぎない。しかしながら、その限られた声の中からも、コミュニティ・デザインをテーマとするワークショップ型の授業を進めたことの意義はことが表れていたように思う。自分たちが、生まれてから現在まで、何かしらのコミュニティに所属しながら生きていること、自分だけではなく周囲の人々と関わり合いながら生きている現実を自覚することができたのではないだろう。その現実のコミュニティには様々な課題があり、それに自分たちも市民として関わっていかなければならないこと、その際に幅広い世代の色々な意見に耳を傾ける必要があることに気づいてもらえたのではないだろうか。

今後の課題としては、一つ目に90分という限られた時間の中で、どのような問いかけをすれば学生たちにコミュニティの一員としての自覚を促し、問題を発見し、それに取り組むことを体験してもらえるかという点があげられる。今回の問いかけ方も一定の学習効果が認められたように思うが、90分では後半のワークショップまでたどり着くことができなかった。そのことを踏まえると、もう一度、問いかけ方を精査する必要があるだろう。

二つ目の課題として挙げられるのが、「交通網を便利すればいい」「ショッピングモールを作ればいい」「総合病院が欲しい」といった大勢の意見に対して、反対意見あるいは実際にそれを行って失敗してしまった地域の例などを紹介する機会がなかった点である。色々な世代の人々の立場に立ち、彼らの声に耳を傾け、自由に意見を出して、それを全体で共有するところまでは今回の実践で実現したが、その意見を批判的に分析するところまでは至らなかった。これは問いかけ方とも深く関わってくる部分ゆえ、今後の検討課題としたい。

今回のコミュニティ・デザインというテーマを高等教育で実践することは、現行の学校教育法で大学の目的が下記のように定められている事項と繋がっている。

#### 学校教育法

**第八十三条** 大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。

- 2 大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

上記の条文にもある通り、学生たちが「社会の発展に寄与する」人間となるための第一歩として、本学部では初年次教育に今回紹介したような「国際学入門」という授業を展開している。他大学においても地域社会と学生を繋げる様々な試みが見受けられる。その知見を取り入れながら、今後もこの授業実践を続け、改善を加えながらより充実した内容にしていきたいと考えている。